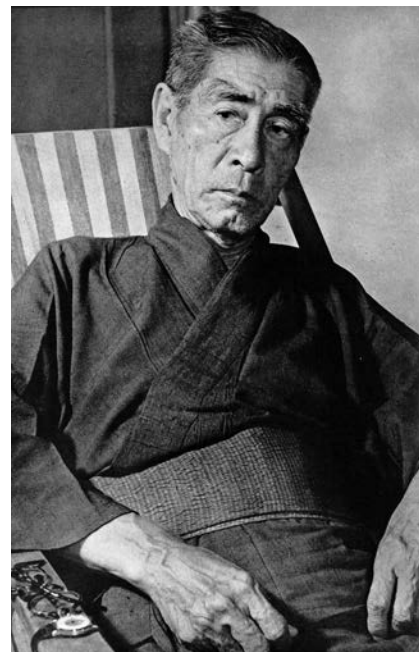


まつ なが じ あん なつ ちゃ じ
松永耳庵 夏の茶事

会期 2025年6月3日|火|-8月17日|日|

会場 松永記念館室

松永耳庵 (1875-1971)
※国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>) より転載

出品No.4 青井戸茶碗 銘「瀬尾」

松永耳庵〔安左工門〕は長崎県壱岐の商家に生まれ（幼名は亀之助）、慶應義塾へ進学し福澤諭吉に学びました。そして福岡での鉄道事業を足掛かりとして電力業界で活躍し、“電力王”と謳われる大実業家となりました。「耳庵」と号して茶の湯の世界に足を踏み入れたのは還暦を迎える頃。精力的に茶道具の名品を蒐集しながら、新しく構えた別荘「柳瀬荘」（現埼玉県所沢市。主屋の「黄林閣」は国指定重要文化財）にて茶の湯三昧の日々を送り、瞬く間に高名な茶人となりました。終戦後、神奈川県小田原市に構えた別荘「老樺荘」（国登録有形文化財）に転居したのは昭和21年（1946）の師走。戦前戦中に蒐集した茶道具の大半は柳瀬荘とともに国へ寄贈しましたが、再び名品の蒐集を開始し、茶の湯生活を新たにします。転居して約3年後に電力事業再編成の主導役に抜擢されてからは激務の毎日を送るようになりますが、その最中にあっても間隙を縫って茶事を催し、多くの人々をもてなし、喜ばせ、そして自ら愉しんだのでした。

当館に寄贈された松永コレクションの殆どは、松永が小田原転居後に蒐集したものです。その頃の松永の茶事の様子は、最も親しい茶友の一人であった仰木政斎〔政吉〕（1879-1959）が残した『雲中庵茶会記』（1958年頃）や、松永の自著『わが茶日々』（1950年）所収の「小田原春秋記」等に垣間見ることができます。

本展では、それらの記録に基づき、松永が初夏から晩夏にかけて催した茶事の道具組を、当館所蔵の松永旧蔵品により再現的に展示紹介いたします。

〔学芸員 後藤 恒〕

緑の好季より夏たけ行きて、高麗梅鉢茶碗、そば、皮鯨、ととや、など夏向きの浅い茶碗には、能くすぎて洗い清むる心の見ゆるものほど、爽やかに清がすがしく感じられるものである」（『桑榆録』104頁）と、本碗を筆頭に夏に相応しい茶碗を手入れするときの愉しみを語っています。

10 山水図

伝・芸阿弥（1431-1485）画
紙本墨画淡彩・掛幅装 147.0×45.5cm
室町時代 15世紀

11 線刻十一面観音鏡像【重要文化財】

青銅製 径31.6cm
平安時代・長承3年（1134）

12 備前大平鉢

陶器 口径42.7cm
桃山時代 16世紀

13 粉吹徳利

陶器 高15.9cm
朝鮮王朝時代 15-16世紀

14 竹一重切花入 銘「普化」

千宗旦（1578-1658）作
竹製 高30.9cm
江戸時代 17世紀

15 おんた笠香合

本阿弥光甫（1601-1682）作
陶器 径11.2cm
江戸時代 17世紀

16 備前矢筈口水指 共蓋

陶器 高17.7cm
桃山時代 16世紀

17 唐物驢蹄口茶入

陶器 胴径6.7cm
明時代 15-16世紀

18 絵高麗梅鉢茶碗

磁州窯系
陶器 口径16.0cm
明時代 16-17世紀

はなげやまそくおう いっせい
畠山即翁〔一清〕（1881-1971）はポンプの設計製作に取り組み株式会社荏原製作所を創業した実業家で、松永、仰木とも茶の湯を通じて親しく交流した人物です。『雲中庵茶会記』においても席主や招客として度々登場します。この日は畠山を正客として、林屋亀次郎（金沢出身の実業家・政治家）、服部山楓夫妻、塩原千代（服部山楓の義母）、田中親美（古筆研究家）、栗山添光〔善四郎〕（料亭「八百善」主人）らを招いての茶事。

よりつき
寄付に集った招客たちを最初に迎えた掛軸は、室町時代の絵師・芸阿弥の作と伝える山水図（10）。遠景の滝は大きな水煙をあげ、手前には懸崖の間を歩く人物が描かれています。ドドドドと滝の音が響く山奥の谷、その巖かで涼やかな空気が伝わってくるようです。続いて「四畳半席」すなわち茶室「松下亭」にて、床に掛けられた伝・俵屋宗達筆の「禊の図」（所在不明）、肘掛窓に配された平安時代の鏡像（11）などの飾り付けを拝見後、広間にて懷石のもてなしです。旬の魚アユの塩焼きは《備前大平鉢》（12）に盛られ、酒器の徳利には《粉吹徳利》（13）が用いられました。

中立後、再び松下亭へ導かれ、松永が練った濃茶を巡服しました。（14）～（17）はその時に用いられた茶道具です。床の宗旦作竹花入（14）にはオオヤマレンゲを活け、茶碗には「蕎麦」と「彫三島」の二碗が用意されました。前者はおそらく《蕎麦茶碗 銘「夕月」》と思われます（本展では茶室展示ケース「春草廬」に陳列しています）。この時の松永の濃茶を仰木は次のように記録しています。「お手まへに於ては、流派を正しく行れる正客次客を前に、平然と耳翁一流の無規格にもよく練れ、九重の昔をよく味えた」と。「九重の昔」とは宇治抹茶の銘柄のこと。とかく松永の濃茶点前は我流でありながらよく練られて美味であったようです。

濃茶が終わると、老樺荘の裏手にあった田舎家風茶室「無住庵」へ移動。この茶室は埼玉にあった江戸時代の古民家を昭和30年（1955）、老樺荘の裏手に移築したもの（現在は主屋の北隣に移設。国登録有形文化財）で、茶事の最後にここで薄茶を振る舞うのが恒例でした。この時用いた茶碗「梅鉢」は《絵高麗梅鉢茶碗》（18）とみられます。松永は自著において「新

〔凡例〕

- 下記3件の茶事の記録は、仰木政斎著『雲中庵茶会記（影印本）』2冊組（味岡敏雄編集・発行、1997年）、及び松永耳庵著『わが茶日々』（河原書店、1950年）の記述から抽出、整理、列举したものです。
- 「招客」及び内容の記載順は原文の記載順に従っています。
- 茶室名及びその中の各室は◆で示し、道具の列举は「／」で続いています。
- 茶事の流れを示す懷石、中立、後座、濃茶、薄茶などの情報は、原文の表記に従って【 】で示しています。
- 本展の出品作品に同定される道具には、太字（ ）で本展出品番号を付しています。
- 判読できない文字は□としています。

黄梅庵の昼会

昭和24年（1949）7月16日（土）条

（出典：『雲中庵茶会記』戦後・137-139頁「黄梅庵の昼会」、『わが茶日々』400頁）

〔招客〕 斎藤寿福、山田瓢庵、田山方南、藤沢寂仙、仰木政斎
◆黄梅庵 寄付：床 四代綱吉筆時鳥に飛燕の横物
◆小間：床 徹書記の消息／風炉 宗四郎 釜 枯木に猿地文筒 【懷石】向 胡瓜に海老の酢あえ 器は唐津割山椒【1】／汁 地みそネギ／碗 小海老に椎茸青豆／焼物 蒲焼／進魚 雲丹／八寸 鯨薫製 青梅に豆ラッキ―／肴物 胡瓜に味そ漬／お湯／お菓子 蒸物 <後座>
【濃茶】床 籐組鈍翁旧蔵花入【2】花 撫子桔梗／水指 柿の蒂とも云ふべき平／茶入 利休所持 引家形朱宗旦直書 利休□庵旦とあり 之又鈍翁遺愛品／茶杓 千ノ少庵作【3】／茶碗 青井戸【4】
◆広間：唐金風炉に四方釜雲鏝付／水指 南蛮／茶碗 斗々屋 替唐津の平／茶入 唐物中次／杓 象牙／広間床 伝宗達蓮花の幅【5】

小田原の老櫛荘へ転居して3度目の夏。古美術商である斎藤寿福庵〔利助〕と山田瓢庵〔健太郎〕、茶人の藤沢寂仙（戦中、柳瀬荘に疎開）、国の主任文化財調査官をつとめていた田山方南らを招きました。場所は、前年（1948年）の6月に老櫛荘敷地内に設けた茶庵「黄梅庵」。三畳下座床の茶室に八畳の広間などを備えたこの建物は、もと堺の商人・今井宗久（1520-1593）の所領として奈良にあったのを松永が入手し、老櫛荘主屋の北隣に移築したものでした（松永没後は堺市博物館の敷地内に移築され現在に至ります）。

招客たちの来荘は午前11時。田山方南を正客として黄梅庵へ。三畳小間の床に掛かっていたのは室町時代の臨済宗の僧・徹書記の消息（現在所在不明）。その日付は、まさにこの日と同じ「七月十六日」。この日に招かれた所以を知った一同は感嘆したことでしょう。懷石の向付は上野焼の割山椒形向付【1】（当時は唐津焼と見なされていました）に胡瓜・海老の酢あえ。焼物には小田原名物のウナギ蒲焼という、土用の丑の日を前にした心にくいもてなしです。後座の床にはキキョウナデシコが活けられた《白錆籠花入》【2】。鈍翁旧蔵のこの籠花入は、松永にとって夏季の茶事には欠かせない一品でした。《青井戸茶碗 銘「瀬尾」》

【4】にて得意の濃茶を振る舞うと、広間へ移動。その床には伝・俵屋宗達の《蓮池図》【5】という季節に相応しい一幅が掛かり、仰木は「さすがと消夏的气張り良いお馳走であった」と賛辞を送っています。

さて松永はこの茶事を振り返って、次のように反省しています。「茶碗は蕎麦夕月を用ひる積りであったが、水指とつくので小服の青井戸を用ひた。あとで楽茶碗の方がよく映ったと思った」（『日夕』400頁）と。つまり濃茶には平茶碗である《蕎麦茶碗 銘「夕月」》（本展では茶室展示ケース「春草廬」に陳列しています）を用いる予定であったものの、水指が平水指なので、かぶるのを避けて青井戸茶碗【4】に変更したのですが、結果的には楽茶碗の方が良かったとのこと です。

戦前戦中に蒐集した茶道具類の殆どを国へ寄贈して、手元に残した、または転居後に新たに手に入れた道具より思考錯誤しながら茶事を催していたことが想像できます。この4か月後、松永は戦前からの約16年に及んだ隠居生活を終え、政府からの要請に応じて電気事業再編成審議会会長に就任。時に満73歳。電気事業再編成の主導役として「電力の鬼」と称されるほどの大車輪の活躍を見せることになるのです。

1 上野割山椒形向付 6客

陶器 径11.0cm（各）
桃山時代 17世紀

2 白錆籠花入

竹・籐製 高18.5cm
桃山時代 16-17世紀

3 茶杓 共筒

千少庵（1546-1614）作
竹製 長18.0cm
桃山時代 17世紀

4 青井戸茶碗 銘「瀬尾」

陶器 口径13.6cm
朝鮮王朝時代 15-16世紀

5 蓮池図

伝・俵屋宗達（生没年不詳）画
紙本墨画・掛幅装 105.9×40.8cm
江戸時代 17世紀

大暑の松下亭

昭和29年（1954）8月1日（日）条

（出典：『雲中庵茶会記（影印本）』戦後・415-418頁「小田原松下軒の茶」）

〔招客〕 縣治朗、蓑原善次郎、服部山楓夫妻、蓑半農軒、吉田水戸幸主、仰木政斎

◆八畳広間：【濃茶】土肥二三作竹筒に花紫色朝顔／炉先（仰木政斎が）今春調製した時代木彫彩色の華鬘応用の風炉先／大ヤツレ鉄風炉に探幽下絵ある筒釜を古瀬戸の大敷板にすへ／水指 大侘の上期瀬戸窯 雷鉢／茶碗 絵志野筒【6】元大阪平瀬家旧蔵／茶入 宗旦在判小甕（仰木政斎旧蔵）／茶杓 針屋宗春作共筒に慶長二丁西正月三日造之とあり

◆寄付は旧広間廊下：大テーブル上に時代根来足付長盆に／白磁南京汲出し／祥瑞風の振出

◆広間：昨秋青邨画伯の筆になりし翁の寿像白描（〔7〕はその下絵）

◆（庭伝いに）小間（松下亭）へ：床 床に伝俊頼筆歌切 かるからにわかなは〜外一首【8】【懷石】膳 松木膳／向 鯛のアライ 切り皿／汁 ジュンサイ／碗 胡摩豆腐／焼物 蒲焼 鉢は志野銅鑼鉢【9】／強魚 子芋を志野赤身の小鉢へ／進め魚 雲丹を山楓氏土産の染付鉢に／八寸 塩むし枝豆／湯 針ショウガ／香の物 アチャラ漬 鉢絵唐津沓鉢 <中立>

◆八畳広間：【濃茶】古材大柱に古伊賀花入が懸られ 木槿 アサミ芋の葉／置戸棚上 金地芦手螺鈿の香箱（鏡の巢）／風呂釜 水指は朝と同然／茶碗 片身替平

工芸家のあがじ りょう縣治朗、建築家で老櫛荘の増改築にも携わった蓑原善次郎、服部時計店（現・セイコーグループ株式会社）社長・服部山楓〔正次〕（1900-1974）夫妻、美術商の蓑半農軒〔進〕、同じく美術商「水戸幸」の店主（3代・吉田孝太郎か）ら、松永にとって気安い茶友たちを招いての茶事です。場所は老櫛荘の主屋で、この西南隅には前年の昭和28年（1953）に四畳半台目の茶室「松下亭」が、増築により設けられ、益田鈍翁の命日である12月28日に席披きの茶事が行われました（『雲中庵茶会記』戦後・359頁「小田原松下軒新席開をかね鈍翁忌」）。年明けて初めて迎える夏の一日に催されたこの茶事は、松永が欧州への出張を前に企画したものでした。仰木の記述には当日の天候は書かれていませんが、朝、小田原行きの電車が海水浴客で混雑したというので、きっと好天に恵まれたのでしょう。

まず主屋の八畳広間で濃茶。用いられた茶碗は、平瀬家旧蔵の「絵志野筒」【6】。一般的に見込みが深い筒茶碗は比較的に保温性が高いことから暑い時期には適さないとされますが、亭主松永はお構いなし。本碗を拝見した仰木は「絵付の無企画と、殊に高台作の面白さに、外部胴のククリの趣きなど、近頃あまり目にふれない名碗である」と讃えています。隣の十畳広間の床には、前年の秋に前田青邨が描いた松永の肖像画が掛けられました。【7】はその下絵で、平茶碗を手にする松永が活写されています。

続いて庭伝いに「松下亭」へ。床を仰ぐと平安時代の歌集『後撰集』の断簡（いわゆる《後撰集切》）の掛軸【8】で、二首が書かれています。ひとつは平安

前期の歌人・藤原興風の歌「折るからに我が名はたちぬ女郎花 いざおなじくば花々に見む」、もう一首は読人しらずの歌「秋の野のつゆにおかるる女郎花 はらふ人なみぬれつつやぶる」。筆者と伝えられる源俊頼は平安後期の歌人です。鮮やかな黄色の花を咲かせ「秋の七草」に数えられるオミナエシは、夏には花を咲かせます。8月1日は、気象学的には夏真っ盛りの時期といえますが、暦の上では「立秋」を間近に控えた晩夏にあたります。秋の到来をほのめかすこの掛軸を仰木は「季節適切のお幅」と評しています。

6 志野筒茶碗 銘「露香」

陶器 高9.8cm
桃山時代 16-17世紀

7 松永耳庵老之像（下絵）

前田青邨（1885-1977）画
紙本墨画淡彩・掛幅装 89.4×66.4cm
昭和28年（1953）頃

8 後撰集切

伝・源俊頼（1057-1129）筆
紙本墨書・掛幅装 20.0×16.0cm
平安時代 11-12世紀

9 志野桐絵鉦鉢

陶器 径27.1cm
桃山時代 16-17世紀

畠山即翁らを迎えて

昭和32年（1957）6月30日（日）条

（出典：『雲中庵茶会記（影印本）』戦後・657-659頁「松下軒の茶」）

〔招客〕 畠山即翁、林屋亀次郎、服部山楓夫妻、塩原千代、田中親美、栗山添光、仰木政斎
◆寄付廊下の一部を屏風に囲われ：隣室床 伝芸阿弥筆真の山水大幅【10】／湯 型の如く備ある
◆四畳半席（松下亭）：床 宗達筆彩色襖の図 色紙大の幅／書院 春日社旧蔵菩薩像線刻円鏡【11】／土風炉 宗四郎／釜 芦屋という備付を一見した後
◆奥の広間：部屋床 伯子庭と落款ある元人筆 石菖の図横物 黒田家旧蔵【懷石（包丁は白水）】向 平目細切甘酢 器織部／汁 ナメコ合味噌／碗 胡麻豆腐／焼物 鮎塩焼 鉢備前大鉢【12】、丹波の二ツ／進魚 雲丹 染付四方へ／強魚 小芋に味噌かけ 金襴手小鉢／湯 珊瑚／八寸 伊勢海老姿むし福豆／肴物 アチャラ漬 鉢伊賀踏鉢 皮鯨／酒器 銚子の外粉引ノ徳利【13】／杯 無地刷毛、六ツ捻、和蘭陀 <中立>
◆寄付：菓子 薑餅 <中立>
◆茶席（松下亭）：【濃茶】床 宗旦作一重【14】花大山蓮／香合 空中作御田笠【15】／水指 古備前矢筈【16】／茶入 漢作驢蹄【17】／茶杓 北向道陳作／盆 唐物／茶碗 蕎麦、彫三島の二碗
◆田舎家（三畳の田舎家に八名）：【薄茶】掛物 光広卿十牛の幅／釣釜／茶碗梅鉢【18】 替黒染